

とりたて詞「も」の基本義と「疑問語＋も」に関する考察 —中国語“也”との対照という視点から—

周 然 飛

キーワード: とりたて詞、も、也、疑問語、対照

要旨

本論文では、中国語“也”との対照という視点から、「も」の意味の本質は何であるか、「疑問語＋も」の用法が成立するプロセスはどうであるか、すなわち個別的な用法「疑問語＋も」はとりたて詞「も」の基本義とどのような関係性を持つか、「疑問語＋も」の用法の性質と特徴はどうであるかについて考察した。

1. はじめに

各とりたて詞はそれぞれ個別的な意味と用法を持つが、とりたて詞の中で疑問語につき、「疑問語＋～」の用法を持つのは「も」「でも」「なら」に限られる¹。日本語記述文法研究会編(2009:160)によれば、「疑問語＋も」と「疑問語＋でも」はとりたてとは異なる機能を果たし、「疑問語＋なら」は基本的なとりたての用法と変わらないという。紙幅の都合上本論文は「疑問語＋も」だけを考察対象とする。

「疑問語＋も」の「も」はとりたて詞「も」の基本義と異なる性質と機能を持つが、同じとりたて詞として共通点も存在するため、「疑問語＋も」の用法はとりたて詞「も」の基本義と一定の関係性を持つと推測できる。従ってとりたて詞「も」の意味の本質を把握するためには、「も」の個別的な用法である「疑問語＋も」の性質を考察する必要があると思われる。なお、「いくつ」や「何人」などの数量を表す疑問語に「も」がついた形式(「いくつも」「何人も」等)も多く存在するが、これらは「も」の数量強調の機能とつながるもので、別の問題となるので、今回は考察対象としない²。

とりたて詞「も」に対応する中国語の表現として、“也”が挙げられる。また、“也”には「も」同様「疑問語＋～」の用法もある。本稿では、まず「も」と“也”についてそれぞれの先行研究を踏まえた上で、「も」が基本義を表す場合と疑問語と共起する場合において、どのようにとりたてるか、また、“也”が基本義を表す場合及び疑問語と共起す

る場合において、日本語とどう異なるかを問題とし、「も」と“也”の相異を明らかにする。そして、「も」の意味の本質は何であるか、「疑問語+も」の用法が成立するプロセスはどうであるか、「疑問語+も」の用法の性質と特徴はどうであるかについて考察したい。

2. 「も」と“也”の基本義に関する考察

2-1. 「も」の基本義

「も」はとりたて詞の中でも盛んに研究されてきた語であり、とりたて詞「も」の意味に関する先行研究は多く見られる³。研究者や研究の視点によって、アプローチや用語は異なるが、とりたて詞「も」の基本義の中核的な内容には大きな差異がないと考えられる。本稿では沼田(1986, 2000, 2009)の論述を主な参考として、とりたて詞「も」の基本義をまとめたい。益岡(2000)は、とりたて詞の意味を分析する際に沼田氏がとった手法について、「とりたて詞各語の意味は「主張・含み」「断定・想定」「自者・他者」「肯定・否定」の4組8個の基本的な「一次特徴」と各語に個別に見られる「二次特徴」とによって表すことができる」とまとめている。

本節では、その手法に従い、とりたて詞「も」の基本義に関する沼田氏の主張を紹介する。「も」には「名詞+も」「節+も」「副詞的成分+も」「述語+も」「数量語+も」「疑問語+も」の接続形式がある。基本義を表す場合、「も」が「名詞+も」の形式に現れるのが一般的であるで、本稿は考察対象を「名詞+も」に絞り、「も」の基本義を考察したい。沼田氏の主張によれば、とりたて詞「も」には基本的に(1)の三種類の意味があり、(2)～(4)の例文が挙げられている。

(1)も 1:累加 も 2:意外 も 3:不定他者肯定

(2)(足の動きに合わせ、)自然に手も動かしている。 (も 1)(沼田2000:170)

(3)(彼の放蕩ぶりには)親も/さえ愛想を尽かした。 (も 2)(沼田2000:171)

(4)私も何とか無事定年を迎えることができてまして、…。 (も 3)(沼田2000:172)

まず(3)を例として、(2)～(4)の例文の「主張」の部分の意味を説明する。(3)の「も」は自者「親」をとりたて、主張で「愛想を尽かした」を事実であるとして肯定する。(2)～(4)の例文を考察した結果、「主張」の部分の意味は同じく「断定・自者－肯定」であることが明らかになった。沼田氏の主張によれば、三種類の「も」の意味の異なりは「含み」の部分に現れる。(2)の場合、含みで他者「足」を「動かしている」ということを断定し、肯定する。(3)の場合、他者「親以外の他人」は「愛想を尽かすと思ったが」、自

者「親」は「愛想を尽かさなと思った」という含みがある。つまり、含みに「他者－肯定」と「自者－否定」の二重の意味が読み取れる。また、含みの内容は真ではなく、ただの「思った」という状況なので、想定におけるものである。(4)の場合、他者「私以外の人」は「何とか無事定年を迎えることができる」ということを真として肯定する。しかし、前後の文脈には他者が現れないので、「私以外の人」は具体的に誰なのかを文脈によって想定しにくいと思われる。そのような「他者が想定しにくい」点を「も3」の二次特徴として扱いたい。沼田氏は上記の手法に従い、三種類の「も」の意味を以下の表1の通りまとめている。

表1 三種類の「も」の意味

も	主張:断定・自者－肯定
1	含み:断定・他者－肯定
も	主張:断定・自者－肯定
2	含み:想定・他者－肯定/自者－否定
も	主張:断定・自者－肯定
3	含み:断定・他者－肯定 二次特徴:他者は不定

表1に示される通り、三種類の「も」の意味の共通点は主張の部分であり、同じく「断定・自者－肯定」を表す。そして、含みの部分に同じく「他者－肯定」を表す。その共通点以外に、三種類の「も」は含みの部分に意味の差異が見える。本稿では、「も1、2、3」の意味を「も」の基本義とする⁴。

2-2. “也”の基本義

楊(2002)、呂(1999)、馬(1985)、興水・島田(2009)の論述によれば、“也”には基本的に(5)の二種類の基本義がある。

(5)也1:類似事態⁵の追加

也2:強調表現

楊(2002)によれば、中国語の“也”の基本義は「類似事態の追加」とすることができる。また、呂(1999:595)によれば、“也”は「二つの事態は同じであると示す(筆者訳)」という基本義を持つ。本稿では、(6)のような“也”の意味を「類似事態の追加(也1)」とする。また、“也”には「強調表現」という基本義がある。呂(1999:596)によれば、“也”は語気を強め、強調の意味も持つ。興水・島田(2009:310)は“也”を「…でさえも」という意味で使い、強調の表現ができる」と述べている。本稿では、(7)のような“也”の意味を「強調表現(也2)」とする。意味的に、“也1”は「も1、3」と対応し、“也2”は「も2」と対応すると思われる⁶。

(6)风停了,雨也住了。(風が止み、雨も止んだ。)

(呂1999:595)

(7)这件事连我也知道。(このことは私でさえ知っている。)(興水・島田2009:310)

2-3. 「自者」「他者」と「類似事態」の比較

前節によって、「も」と“也”の基本義には類似点が見られると同時に、相違点も存在することが明らかになった。二語の基本義を解釈する場合、最も大きな相違点は「自者」「他者」と「類似事態」の違いであると思われる。「も」と“也”の基本義の意味に対する詳しい比較については後述するが、本節では、「自者」「他者」と「類似事態」を比較することによって、「も」の意味の本質について考察する。

2-1節において紹介した沼田氏の手法は、自者と他者が肯定されるか、否定されるか、またその事柄が断定であるか、想定であるかという視点から、主張と含みの意味を解釈するものである。つまり、とりたて詞「も」が表す意味の中心は自者と他者である。自者はとりたてられる要素であり、他者は自者と同類の要素である。とりたて詞「も」の意味を解釈する場合において、先行研究は常に要素を中心として解釈していると言える⁷。一方“也”にも要素を意味の中心とする特徴が見える。“也2”は「も2」と類似し、前行要素が他の要素と異なり、強調される要素であるという意味を表す。それゆえ、“也2”も要素を中心として意味を解釈することができる。しかし、“也1”は上記の語と異なり、「類似事態の追加」を表す。つまり、「事態」が意味の中心とされている。例えば、

(8)a. (再掲) (足の動きに合わせ、) 自然に手も動かしている。 (沼田2000:170)

b. (伴随着脚的活動) 手也自然地動了起來。

(8b)の“也1”は「足を動かしている」という事態に、さらに「手を動かしている」という類似事態を加える意味を表す。(8a)の「も」は“也1”と同じ意味を表すので、同じ方法で意味を解釈することができる。また、2-1節で述べたように、この例文を自者と他者を意味の中心として解釈することもできる。つまり、(8a)の意味を解釈する場合、事態を中心とすることも、要素を中心とすることもできる。(8a)が二つの解釈の方法を持つのは、自者と他者に接続する述語が同じであるからである。自者と他者に接続する述語が異なる例として、(9)が挙げられる。

(9) 朝から体がだるいし、熱も出てきた。 (日本語記述文法研究会編2009:21)

(9)の自者「熱」と他者「体」に接続する述語が異なるので、「朝から体がだるい」に累加されるのは要素「熱」だけではなく、「熱が出てきた」という事態である。それゆえ、(9)の場合、要素を中心として解釈するのは難しく、事態を中心として解釈する方が合理的であると思われる。

以上の分析によって、まず「も」の意味を解釈する場合常に二つの方法があること

が明らかになった。即ち、事態を中心とする解釈の方法と要素を中心とする解釈の方法である。自者と他者に接続する述語が同じである場合は、二つの方法で意味を解釈することができるが、自者と他者それぞれに接続する述語が異なる場合は、事態を中心としてしか解釈できない。この現象によって、とりたて詞「も」の意味の中心は要素のとりたてではなく、事態のとりたてであることが明らかになった。

「も2」は主に自者の部分の意外性を強調するので、意味の重点が自者にあると思われる。「も3」は他者が想定できないので、自者しか重視されないと思われる。つまり、「も2」と「も3」は意味の重点が主張の部分にあるので、含みは意味が薄くなり主張と異なる述語が用いられにくいと思われる。意味解釈の方法として、「も2」と「も3」の述語は常に一つしかないので、二つの方法で「も」の意味を解釈できる。一方、「も1」は自者と他者に接続する述語が異なる場合があるので、その場合、意味解釈の方法として事態を中心とする方法しか存在しない。意味解釈の方法は二つ存在するが、「も」の意味の本質は事態のとりたてである。

接続する述語が一つしかない場合、とりたてられる事態と背景である同類の事態は述語が同じであるので、両事態の違いが要素だけに現れるようになる。とりたての基本的な機能はとりたてられる事態を他の同類の事態から際立たせることであるので、両事態の異なる部分こそ注目されるところである。つまり、両事態の述語が同じである場合、両事態の異なりをさらに要素の異なりに絞ることができる。それゆえ、その場合に用いられる「も」の意味を解釈する時、要素のとりたてという意味さえ明らかにすれば十分であり、述語の部分の説明が不必要であると思われる。むしろ、その場合、述語を入れて解釈する方法が効率的ではない。それゆえ、「も」の意味の本質が事態のとりたてであるにも関わらず、要素を中心とする解釈の方法は成立する。「疑問語+も」の用法は述語が一つしかないので、二つの方法で「も」の意味を解釈できるが、より効率的に解釈するため、本論文では要素を中心とする方法で「疑問語+も」の「も」の意味を説明する。

3. 「疑問語+も」の用法に関する考察

3-1. 「疑問語+も」の特徴

「疑問語+とりたて詞」に関する先行研究を踏まえ、「疑問語+も」の特徴を考察する。日本語記述文法研究会編(2009:162)によれば、「も」は「なぜ」「どうして」を除くほとんどの疑問語につくことができる。「も」は疑問語につくと、基本的には否定の述語

と共起し、同類のものすべてを否定する意味を表す。しかし、同書によれば、例外の形として「どれ」「どちら」「どの+名詞」に「も」がついたものは、否定だけでなく肯定の述語とも共起する。否定の述語と共起した場合は、同類のものすべてを否定する意味を表す。肯定の述語と共起した場合は、同類のものすべてを肯定する意味になる。

以上の分析から、「疑問語+も」と述語の共起関係は表2にまとめられる。表2に示したとおり、否定述語としか共起できない「疑問語+も」の形式を「A類」と呼び、否定述語だけではなく肯定述語とも共起できる「疑問語+も」の形式を「B類」と呼ぶ⁸。時間を表す「いつ」に「も」がついた場合、肯定の述語・否定の述語のいずれとも共起できるが、「いつも」は既に副詞として固定化したものなので、本稿では「疑問語+とりたて詞」の範疇に入れないこととする。

表2 「疑問語+も」と述語の共起関係⁹

否定述語としか共起できない(A類)	否定述語及び肯定述語と共起できる(B類)
だれも、何も、どんな[名詞]も…	どれも、どちらも、どの[名詞]も

3-2. 「疑問語+も」と「名詞+も」の比較

2-1節でとりたて詞「も」の基本義を分析した際に、挙げられた例文は全て「名詞+も」の形式である。それらの例文に対する考察によって、主張で「断定・自者-肯定」を表すという基本義が導き出された。「疑問語+も」と「名詞+も」における「も」の意味特徴が同じであるか検証するため、まず、下記のような「疑問語+も」の例文において、とりたて詞「も」の意味を分析する。

(10) 父はパソコンについて何も知らない。 (日本語記述文法研究会編2009:162)

(10)の「も」は自者「何」をとりたて、主張で「「何」を知らない」を真であるとして肯定する、と解釈できるので、(10)の「も」は主張で「断定・自者-肯定」を表すという「も」の基本義を持つと言える。しかし、(10)を(2)～(4)と比較すると、両者の違いと(10)の特殊性が明らかになると思われる。

両者の違いはまず、自者の性質が異なるという点である。自者とはとりたて詞がとりたてる文中の要素であり、他者はそれに端的に対比される自者以外の要素である。なお、自者と他者は同一の集合に属する同類のものでなければならない(沼田2000:159)。(2)～(4)の自者はいずれも特定の要素である(「手、親、私」)。一方、(10)の自者は特定できない要素である(「何」)。(10)のような「疑問語+も」の場合、自者は不特定であるゆえ、とりたてられた自者は集合にある全ての要素であると理解できる。もう

一つの違いは他者の有無という点である。「疑問語+も」の自者が全ての要素であると、集合にあるそれ以外の要素(他者)の数はゼロになる。基本義「も3」の他者が不定他者であるというのは、文脈によって具体的な他者が想定できないという意味であり、他者が存在しないわけではない。つまり、「疑問語+も」の他者は存在しないが、「名詞+も」の他者は存在する。

他者の数がゼロになることによって、「も」は「分布の自由性」「任意性」「連体文内性」「非名詞性」というとりたて詞の四つの統語的な特徴をなくしたわけではないので、「疑問語+も」の「も」は極端な場合のとりたて詞であると思われる。また、他者の数がゼロであることによって、とりたて詞「も」が表す意味の重点が常にとりたてられる事態にあり、背景である同類の事態の意味が希薄化することが明らかになった。

4. A類「疑問語+も」とB類「疑問語+も」の比較

4-1. 基本義との関連性

A類「疑問語+も」とB類「疑問語+も」は後接述語の形式だけではなく、意味的にも差異が存在する。A類とB類の例として下記の例文が挙げられる。

(11) A類: 昨日の反省会にはだれも参加しなかった。 (否定述語)

(12) B類: a. 紅茶とコーヒーのどちらも好きじゃない。 (否定述語)

b. 紅茶とコーヒーのどちらも好きだ。 (肯定述語)

A類の例である(11)から「まさかだれも参加しないと思わなかった」という意外の意味が読み取れる一方、B類の例である(12a, b)のどちらからも意外の意味が読み取れない。つまり、B類の例(12a, b)は単なる事実の陳述を表し、「こうなると思わなかった」という意外の意味を持たない。(11)と(12a)は同じく否定述語と共起する「疑問語+も」の形式であるにも関わらず、意味的な差異が生じる原因として、A類とB類の「も」の意味が異なることが考えられる。そして、前節で「疑問語+も」の「も」は極端状態のとりたて詞であると論述した通り、「疑問語+も」の用法は「も1, 2, 3」のいずれかから生じるものであると考えられる。以上の分析によって、A類の「も」とB類の「も」はそれぞれ「も」の異なる基本義から生じるものであると推測される。2-1節に挙げた表1によって、基本義「も1, 2, 3」の違いは含みの部分であることが明らかになった。そして、「も1」と「も3」は含みの意味がほぼ同じであるのに対して、「も2」は含みの意味が「も1, 3」とかなり異なる。本節では「も」の基本義を大きく「も1, 3」と「も2」の二種類に分け、A類の「も」とB類の「も」の意味を考察したい。

前節で述べた通り、「疑問語+も」の形式の他者は存在しない。言い換えれば、他者を要素の数がゼロである空集合と見なすことができる。この空集合の考え方をうい、(11)を例として「疑問語+も」の含みの内容を解釈する。まず、「も1、3」の含みの体系(「断定・他者-肯定」)で(11)を解釈してみると、他者である空集合が「参加しなかった」ことを真として断定し、肯定する解釈となる。一方、「も2」の含みの体系(「想定・他者-肯定/自者-否定」)で(11)を解釈してみると、他者である空集合が「参加しない」と思ったが、自者「誰」かが「参加すると思った」¹⁰という解釈となる。上記の二種類の解釈を比べると、「も2」の体系の解釈は合理的であると思われる。(11)から「誰かが参加すると思ったのに」という意外の意味が読み取れるからである。つまり、含みに想定の意味が含まれていると思われる。しかし、「も1、3」の体系の解釈であると、その意外の意味が読み取れず、事実を陳述するだけとなる。以上の理由から、(11)のようなA類の「も」は「も2」から生じるものであると考えられる。B類の例(12a、b)の含みも上記のように二種類の解釈ができる。しかし、(12a、b)の含みの解釈として「も1、3」の体系の解釈は合理的であると思われる。(12a、b)が事実の陳述を表し、意外の意味を持たないからである。さらに、(12a、b)の他者の数がゼロであるので、文の意味の重点は自者の事態にあると考えられる。その点が「も3」の「他者は不定」という二次特徴に非常に似ているので、B類の「も」は「も3」から生じるものであると考えられる。

以上の分析をまとめると、次の結論が得られる。A類の「も」は基本義「も2」から生じるものであるに対して、B類の「も」は基本義「も3」から生じるものである。それゆえ、A類の「も」とB類の「も」は意味が異なる。両者の意味的な差異が存在するので、A類とB類の形式全体が表す意味も異なる。

4-2. 疑問語の性質

(13) A類: (再掲) a. 昨日の反省会にはだれも参加しなかった。 (否定述語)

b. *昨日の反省会にはだれも参加した。 (肯定述語)

(14) B類: a. 太郎と次郎のどちらも昨日の反省会に参加しなかった。 (否定述語)

b. 太郎と次郎のどちらも昨日の反省会に参加した。 (肯定述語)

A類とB類の例文を上記の通り挙げる。ここで注目すべきは「誰」と「どちら」という二つの自者の性質の違いである。B類の自者「どれ」「どちら」「どの+名詞」が特定できない要素を示すが、その要素の範囲は常に前文脈に提示されている。例えば、(14)の「どちら」が示す要素は「太郎、次郎」という範囲に属する。「どれ」や「どの+名詞」な

ども同じく、必ず提示された特定の範囲から自者の要素をとりたてるものである。一方、(13)の「誰」が示す要素の範囲が文脈から想定できない。つまり、疑問語の「どちら」と「誰」は共に不特定の自者であるが、「どちら」の範囲は特定できるのに対して、「誰」の範囲は特定できないのである。

また、A類とB類の疑問語の性質を区別する傍証として、以下の例文を挙げる。

○否定述語と共起するA類の例:	○否定述語と共起するB類の例:
* X、Y、Zの <u>だれ</u> も来なかった。	XとYの <u>どちらも</u> 来なかった。
* X、Y、Zの <u>何</u> も知らない。	X、Y、Zの <u>どれも</u> 知らない。
* X、Y、Zの <u>どんな料理</u> も好きじゃない。	X、Y、Zの <u>どの料理</u> も好きじゃない。

A類とB類は同じく否定述語と共起できるが、A類とB類の前に「X、Y、Z」という特定の要素の範囲が出ると、A類の例文は不自然である一方、B類の例文は自然である。この傍証から、A類の疑問語は要素の範囲が特定できないものであり、B類の疑問語は要素の範囲が特定できるものであることが明らかになった。

そして、共起する述語の形式は明らかに疑問詞の性質から影響を受けている。この原因について6節で詳しく論述する。

5. “疑問語+也”と“名詞+也”の関係

呂(1999:596)によれば、“疑問語+也”の用法は“也1”の基本義から生じるものであり、否定述語としか共起できない。つまり、“疑問語+也”は“也2”の基本義と関わらず、本質的に“疑問語+也1”という形式である。具体的に説明すると、下記の例(15)が挙げられている。呂(1999:596)によれば、(15)は「張さんも喋らない。李さんも喋らない…」という意味を含み、この用法は“也1”と本質的に同じであるので、“疑問語+也”の用法は“也1”の基本義から生じるものである。

(15) 谁也不说话。(誰も喋らない。)

(呂1999:596)

6. 「疑問語+も」と「疑問語+也」の比較

6-1. 「疑問語+も」と「疑問語+也」の意味の比較

表3 「疑問語+～」において「も」と「也」の意味

疑問語+也1	類似事態の追加
A類: 疑問語+も2	主張: 断定・自者-肯定 含み: 想定・他者-肯定/自者-否定
B類: 疑問語+も3	主張: 断定・自者-肯定 含み: 断定・他者-肯定 二次特徴: 他者は不定

以上から、「も」と「也」が「疑問語+～」の形式において表す本質の意味は、表3にまとめることができ

る。表3から、「疑問語+也1」及び「B類:疑問語+も3」が「A類:疑問語+も2」と最も大きく違うのは意外の意味を持つか否かという点であることが明らかになった。A類とB類の意味的な比較は4-1節で行ったので、本節は「疑問語+也1」と「A類:疑問語+も2」を意味的な面から比較する。

(16)(再掲) a. 誰も喋らない。 b. 谁也不说话。 (呂1999:596)

(16b)は単なる事実を述べ、「意外」の意味が読み取れない。一方、(16a)に「まさか誰も喋らないとは思わなかった」という「意外」の意味が多少含まれている。(16)の二文の違いを含みの意味の立場から説明すると、(16a)の含みは「想定・他者-肯定/自者-否定」の意味を持つが、(16b)の含みは「…と思った」という「想定」の意味を持たない。「疑問語+〜」の用法を生む基本義の立場から説明すると、「も2」は意外性を表す意味を持つ一方、「也1」は意外性を表す意味を持たない。「也」の中で、「意外」の意味を表すのは強調表現である「也2」であるので、「也1」から生じる用法が「意外」の意味を持たないのは当然である。

6-2. 「疑問語+も」と「疑問語+也」の述語形式の比較

表4 疑問語+「も」、「也」と述語の共起

	も2 (A類)	も3 (B類)	也1
否定述語	○	○	○
肯定述語	×	○	×

疑問語+「も」、「也」と述語との共起関係は表4にまとめられる。前節で触れたように、「也1」の意味が「も2」と異なり「も1、3」と似ているため、「疑問語+也1」がA類「疑問語+も」と意味的に異なり、B類「疑問語+も」と同じく事実の陳述を表し、意外の意味を表さないことによって、「疑問語+も」の全体の意味は「も」の意味と関連することが明らかになった。一方、「也1」は意味的に「も1、3」と類似するが、表4に示された通り、「疑問語+〜」の形式に用いられる時の述語共起関係は「も3」と異なり、「も2」と同じである。この結果によって、「疑問語+〜」と接続する述語の形式(否定・肯定)は「も」の意味と関係しないことが明らかになった。

以上の分析によって、共起する述語の形式は疑問詞の性質と関連することが明らかになった。4-2節で述べた通り、A類の疑問語は要素の範囲が特定できないものであり、B類の疑問語は要素の範囲が特定できるものである。述語が否定である場合、両者の差異がわからないので、考察対象を述語が肯定である場合の例文に絞る。例えば、次のような文である。

(17) (再掲) a. *昨日の反省会にはだれもも参加した。 (A類:肯定述語)

b. 太郎と次郎のどちらも昨日の反省会に参加した。 (B類:肯定述語)

2-3節で述べたとおり、とりたて詞「も」の本質は要素のとりたてではなく、事態のとりたてである。そして、とりたての最も重要な意味は、とりたてられる事態の性質が特別であり、他の同類の事態を背景とし、その性質を際立たせることである。つまり、とりたてられる事態の性質を強調し、より明確に説明することである。とりたてられる事態の性質が不明であり、明白に説明できない場合、とりたては成立しにくいと思われる。

「疑問語+も」の形式は全部否定と全部肯定の二種類の意味しか表さない。「疑問語+も」の形式に後接する述語が否定である場合、文は全部否定の意味を表し、とりたてられる事態の意味が常に明白である。「も」の前に用いられる要素の範囲が特定できるか否かに関わらず、とりたてられる事態の意味は「～のようなことは存在しない」である。この事態の意味が明白であるので、後接する述語が否定であると、A類の場合であろうがB類の場合であろうが文は成立する。

「疑問語+も」の形式に後接する述語が肯定である場合、文は全部肯定の意味を表す。しかし、疑問語の性質によって文が成立しない可能性も存在する。(17)を例として、この点について詳しく説明する。(17b)のような要素の範囲が特定できる自者(疑問語)を全部肯定するというのは、範囲内のすべての要素を一つずつ肯定することを意味する。(17b)の場合、自者「どちら」を肯定するというのは、「反省会に参加した」という事態について「太郎」「次郎」をそれぞれ肯定することを意味する。この場合、とりたてられる事態の内容は明白である。一方、(17a)のような要素の範囲が特定できない自者を全部肯定する場合、要素の範囲が特定できないため、肯定される自者の範囲は一体どこまでであるかが明らかになっていない。つまり、とりたてられる事態の意味が不明であり、詳しく説明できないのである。意味が不明な事態をとりたてることができないので、(17a)のような文は成立しない。

7. おわりに

本稿では、中国語「也」との対照という視点から、とりたて詞「も」の基本義と「疑問語+も」の用法について考察した。今回の考察によって、とりたて詞「も」の意味の本質、「疑問語+も」の用法が成立するプロセス、「疑問語+も」の用法の性質と特徴を明らかにした。とりたて詞「でも」は「も」と類似し、「疑問語+でも」という独特の用法を

持つが、その性質は「も」と大きく異なると思われる。「でも」及び「疑問語+でも」はどのような特徴があるか、「も」と如何なる違いと類似点を持つかについてまだ明らかにされていない。今後は、とりたて詞「でも」及び「疑問語+でも」の用法に関して考察を行いたい。

注

1. 会話において聞き手の発語を受けて問い返す特殊な疑問文の場合、「だけ」なども疑問語につく場合が見られる。しかし、その形式は問い返し疑問文にしか現れなく、例外的なものである。とりたて詞の「疑問語+」の用法としない。
2. 「数量語+も」についての好論として、沼田(1986, 2009)、楊(2000, 2002)がある。
3. 「も」は従来、副助詞あるいは係助詞として論じられ、その方面からの研究が多く見られるが、本稿では「とりたて詞」としてのアプローチに限定して考える。
4. 「も1」と「も3」は意味的に近いものである。「も2」の意味と区別する時、「も1, 3」をまとめて考えることは可能である。しかし、「も1」と「も3」に他者が具体的に想定されるか否かという違いが存在するので、本稿では「も」の基本義を考察する時、「も1」と「も3」を区別する。
5. 類似事態は沼田氏が述べた「自者」「他者」と異なる概念である。例えば、下記の例文の「奥さん」はとりたてられる要素で、「自者」であり、「鈴木さん」は背景と同類の要素で、「他者」である。一方、「奥さんは医者だ」という事柄は前文脈に提示された「鈴木さんは医者だ」という事柄と類似する事態、即ち類似事態である。
・鈴木さんは医者だが、実は、奥さんも医者だ。
6. 呂(1999:595)によれば、「也」は基本義以外に、仮定の前提がどうであるかにかかわらず、結果が変わらないという周辺的な意味を持つ。周辺的な意味を表す「也」はとりたて詞「も」に対応しないと思われるので、本稿では周辺的な意味の「也」を考察対象としない。
7. 沼田(2009:85)は「とりたて詞が文中で意味的に影響を及ぼし得る最大の領域で、当該のとりたて詞によって、他と範列的な対立関係をなすとらえられる、述語句の範囲」を「とりたての作用域」と呼び、事態への配慮も示しているが、ここではあくまでも「自者」「他者」という用語にこだわって論じた。
8. 本稿では、A類とB類は「疑問語」及び「も」を含む「疑問語+も」という形式の全体のことを指す。
9. 「だれもが」のような「が」が「も」に後接する形式については別問題として、今回は対象として扱わない。また、「どこへも」「だれとも」のような「疑問語+格助詞+も」の形式も対象とせず、考察対象を「疑問語+も+述語」だけに限る。
10. (11)の「自者-否定」は「誰も参加しない」の否定である。そして、「誰も参加しない」の否定は「誰かが参加する」である。それゆえ、(11)の「想定-自者-否定」は「誰かが参加すると思った」である。

参考文献

- 奥水 優・島田亜実(2009)『中国語わかる文法』大修館書店
 日本語記述文法研究会編(2009)『現代日本語文法5』くろしお出版
 沼田善子(1986)「とりたて詞」奥津敬一郎・沼田善子・杉本武編『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社
 沼田善子(2000)「とりたて」金水敏・工藤真由美・沼田善子編『日本語の文法2 一時・否定と取り立て』岩波書店
 沼田善子(2009)『現代日本語とりたて詞の研究』ひつじ書房
 馬 真(1985)『説「也」』陸俊明・馬真編『現代漢語虚詞散論』北京大学出版社
 益岡隆志(2000)「はしがき」金水敏・工藤真由美・沼田善子編『日本語の文法2 一時・否定と取り立て』岩波書店
 呂 叔湘(1999)『現代漢語八百詞(増訂本)』商務印書館
 楊 凱榮(2000)「数量詞+も」とそれに対応する中国語の表現」草薙裕編『現代日本語の語彙・文法』くろしお出版

楊 凱榮(2002)「も」と“也”－数量強調における相異を中心に」生越直樹編『シリーズ言語科学4対照言語学』東京大学出版会

—東北大学大学院生—